

芥川龍之介の中国表象の新側面
——同時代の西洋側の中国観を補助線として——

朱莉

論文要約

本研究は芥川の中国観について、同時代の西洋から中国への眼差しを補助線として、新たな側面を検討するものである。具体的には、1920年代における日本人の様々な中国紀行の中で芥川の中国観察をたどり直した上で、ラッセルの『中国の問題』と比較し、魯迅のラッセル・芥川両者への評価をも参照しつつ、芥川の『支那游記』を中心にその中国観の従来取り上げられなかった側面を解明したい。

第一章「芥川龍之介『支那游記』における南京イメージ——同時代各界の日本人旅行者との比較を通して——」は比較論である。ここでは、芥川の中国旅行を、近代日本における中国紀行の流れの中で論じる。特に、谷崎潤一郎、佐藤春夫など著名な中国通の文人ではない日本人の中国紀行と、芥川の『支那游記』「南京」の記述との比較を通じて、芥川の中国観の独自性について考える。第一節では、秦淮河の描写をめぐって、多くの旅行者は秦淮を古典的で享楽の場所であるとしたが、芥川は秦淮河を「俗臭」に溢れる場所として記していることを指摘した。第二節では秦淮妓女の描写をめぐって、他の旅行者が綴る美しい秦淮佳人像に対して、芥川は頹廢的な秦淮イメージとともにそこにいる妓女が「姝麗」（美女）ではないと評したその意図を考察した。特に、芥川が「姝麗」の出典として言及している昆曲『桃花扇伝奇』と『秦淮画舫録』中の妓女像の検討によって、芥川が秦淮美人に昆曲を背景とした芸術性を期待していたことを論じた。第三節では、『桃花扇伝奇』の主人公「香君」を取り上げ、芥川にとっての伝統演劇の「哲学」性を踏まえて、南京人物が体現すべきだと芥川が考えた思想や精神を分析している。特に、香君をはじめとした「姝麗」の愛好、「俗臭」な人物への「恨」は芥川の複雑な中国感情を形成していると述べた。これらの考察を通して、芥川の南京像ひいては中国の全体像は、先行研究で注目されてきた想像と現実というキーワードだけで割り切れず、他の旅行者の観光遊樂的な態度に対する反感と異文化批評者としての批判精神、中国への愛好と「恨」という要素も包含していると結論づけた。

第二章「中国批判者から理解者へ」は芥川の中国観の変化を論じたものである。第一節「芥川の北京への愛着」では「俗臭」に満ちた南京像、「雄大」な北京像という芥川の言葉を、中国南部と北方の対照的なイメージとしてとらえ、芥川の中国観は中国の北方を旅する過程で変わっていったことを浮き彫りにしようと試みた。第二節「芥川龍之介の「蝴蝶夢」——昆曲との関係性を視座として——」では、芥川の長期的な昆曲に対する関心に即して、未完の戯曲作品「蝴蝶夢——A Parody」

の内容を分析した。芥川の戯曲「蝴蝶夢——A Parody」には、昆曲『蝴蝶夢』の影響が見いだせる。芥川と中国の伝統演劇に関する従来の研究では、京劇を中心に論じられてきた。第二節「1」では、芥川が大学時代に塩谷温による「支那戯曲講義」から昆曲を含む中国伝統演劇について系統的に学習したことを紹介した。「2」では、『支那游記』における多数の昆曲文学作品への言及を取り上げ、芥川が文学作品としての昆曲について素養を持っていたことを指摘した。続く「3」では、『支那游記』「胡蝶夢」に記されている昆曲『蝴蝶夢』を鑑賞した感想を取り上げ、芥川は読む作品としての昆曲だけでなく、演劇としての昆曲にも親しんでいたことを指摘した。「4」では、芥川の戯曲「蝴蝶夢——A Parody」と昆曲『蝴蝶夢』と、それらが取材した『莊子・至楽』の「嘆觸」と『莊子・斉物論』の「夢蝶」の比較精読によって、芥川が昆曲から受けた影響を考察した。これらの考察を通して、芥川と昆曲の関係は文学から演劇、演劇から戯曲創作へと深化していき、更に「蝴蝶夢——A Parody」は芥川の昆曲の芸術性への愛着と老莊思想への関心の反映だと結論づけた。

第三章の第一節「芥川龍之介と B. ラッセルの中国旅行記と魯迅——1920 年代の中国下層階級を中心に——」では、従来の研究では殆ど見られない芥川とラッセルの中国観察の比較を通して、1920 年代の国際的な文脈を踏まえて、東西文化人による中国観のずれを考察した。まず、『支那游記』と『中国の問題』の成立経緯と芥川、ラッセル両者の足取りを押さえた。次に、芥川が書いた「蛇」を感じさせる駕籠かきと、ラッセルの描いた「微笑む」駕籠かきを手掛かりに考察した結果、芥川は中国の下層階級を墮落したものと見なし、ラッセルは下層階級の楽観性を称賛したとまとめられる。これを踏まえて、彼らの中国の未来に対する思索の相違へと考察を進めた。芥川は伝統と因習を超越してゆく「雄大」な未来中国像を構想し、ラッセルは伝統思想と西洋科学を結合する方向に未来中国像を構想した。

魯迅は芥川とラッセルの中国に対する見解に対して正反対の評価を下した。魯迅の芥川賛同の理由は、中国の病弊を指摘した芥川を、魯迅が誠実な批評者として捉えていたからである。他方、ラッセルの中国賛美はお世辞に過ぎないと魯迅は批判した。それは、中国の弊害への賛美は中国への軽蔑に等しいと魯迅は考えたからである。魯迅の賛同や批判の目的は、芥川やラッセルを評価することではなく、中国の民衆を覚醒させることにあった。

第二節「芥川龍之介と B. ラッセルにおける中国近代知識人」では、芥川とラッセルの中国観は下層階級と知識人への認識を基盤として成り立っているという発想から出発し、前節の考察を基に両者の中国観の違いについて更に考えを進める。まず両者とも中国知識人を「若き支那」と称している点に注目し、両者それぞれの知識人像を論じた。ラッセルの書いた知識人は、西洋の科学と中国の伝統的美徳の融合者、中国社会の改良者である。芥川の描いた知識人は、西洋の影響の抵抗者、民衆の意志による中国社会の革命者である。次に、両者とも科举制に言及していることに注目し、両者の知識人像の違いの理由を分析した。ラッセルは、科举制が中国文明の発展を促進する役割を

果たしたと見なし、肯定している。芥川は、知識人と政治の対立に着目し、科举制に現れた統治階級による知識人への束縛を批判している。これらについては、両者それぞれが知識人の西洋科学と伝統を融合する役割を重視し、また知識人の反抗精神を評価する思考の表れであると論じた。また、前節と合わせて考えれば、芥川の中国観は下層階級と知識人との対比により成り立っており、ラッセルの書いた下層階級と知識人には対立関係が見られないと考えた。

非中国人の観た中国は、中国人からの批判、賛同の対象となってきた。芥川の描いた中国は、伝統と現代が対立する中で新旧の物事が遭遇・対立・衝突・変化している場所であった。それに対してラッセルの描いた中国は、危機に陥った西洋文明が参照すべき東洋の知恵の源流である。老荘思想は西洋資本主義やソ連革命式の社会主義と異なる第三の道を提供しているとラッセルは考えていた。魯迅は芥川の中国批判に賛同し、ラッセルの中国賛美を批判した。中国内部から中国文明批判を行っていた魯迅は、芥川の中国の現状批判を共有していた。他方、そうした意図から、西洋の憧れを現在の中国文明に見出すラッセルを魯迅は批判の対象とした。こうした魯迅の評価も影響して、芥川は当時の中国を嫌悪し、批判したと位置づけられてきたが、彼の中国北方における紀行、また昆曲への傾倒を追っていくと、芥川の当時の中国への関心と評価はより複雑な様相を見せるのである。